



# 「官」対「民」

「官」対「民」を選んだので表彰式に出て来い。「新語・流行語大賞」選考委員会が伝えてきたのは信州・長野県知事就任直後の2000年晩秋です。硬直した二項対

立の意図を立候補前も選挙中も当選後も、一度たりとも使っていない僕は辞退。すると他県知事に当選した（現在は立憲民主党所属衆議院議員の）御仁が嬉々として出

★次号の田中の発行口は「田中」だ。

席する勇姿が報じられました。解雇も倒産も無縁。上の顔色ばかり窺う「ヒラメ」公務員も、任用当初はパブリック・サーヴァントの気概を持ち合わせていた筈。土木部に配属された「技術屋」は脚の不自由な独居老人の為に歩道の段差を改修したい、教育委員会に配属された「事務屋」は軽度な障壁を地域の小学校と一緒に学ばせたい、と考えていた筈です。が、前例踏襲な組織の中で何時しか冷温停止状態に陥ってしまう。選挙という洗礼を受けるサーヴァント・リーダーは、そうした哀しき公僕に「人間の体温」を取り戻させる触媒役たるべき。

元「毎日新聞」論説委員長・倉重篤郎氏の仲立ちで外務審議官を務めた田中均・日本総合研究所理事長と、発売中の「サンデー毎日」年末年始特大号で「憂国対談」と銘打ち、「2022年 日本」の自立像」を語りました。「日本は今こそ慎重深いDecentな（見苦しくない）誇りを持つ」とツイッターでも発信する均さんは鋭い。弁証法なき空威張りの『日本凄い論』の面々とは対極だ。諫言という傾聴すべき提言。

なのにメディアは不毛な二項対立で『批判』と一括りする。僕が述べると彼は「僕自身が政府の中に居たし、役人の気持が判る。物言えば唇寒しの霞が関で、誰かが自由に言わねばと政治を叩く事になる。メディアはそう考えれない。役人叩きが常道。役人頑張れとは書かない」と呟きました。誰もが分け隔てなく入れる公園こそ「公」の象徴。日本は、公共事業のイメージを引き摺る「官」と同義語と認識し勝ち。公を行う為に官と政の機能が存在し、官が歯車という官仕えなら、官を動かす為に「的確な認識・迅速な決断と行動・明確な責任」を併せ持った人物が行うのが政にも拘らず。原題『City Hall』フレデリック・ワイズマン監督『ボストン市庁舎』が「洛陽の紙価」改め映価を高めています。ジョー・バイデン政権で労働長官に就任の、ジョン・F・ケネディ同様にアイルランド系カトリック教徒マティー・ウォルシュ氏が市長だった静岡市と同規模な人口70万人自治体に於ける「行政サーヴィス」を写真した長篇4時間34分。在任7年半、常に現場に出掛ける首長の彼は職員や市民との直接対話を通じて「市民に扉を開く公正な行政」の「意識改革」を志します。「外交」にも通ずる「話せば判る」ならぬ「話しても判りきれない」からこそ話し続けねばならぬ、との信念に基づきます。「人々を従わせるのは容易でも、従うべきだと納得して貰うのは至難の業」が原義だった『論語』の「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」を、「理由など教えても為ん方ない。有無を言わず従わせてこそ政治と行政の真骨頂」と曲解した日本との彼我の違いは歴然です。故に「選良」は暗黙知「この国のありよう」を一向に国民に示さず、形式知「この国のかたち」の主張に終始し、誤送船団「記者クラブも「改革を止めるな」と時代遅れな抽象的テープレコーダーを回し続けているのです。論より証拠。第一次安倍晋三政権以来都合28人の「拉致担当大臣」の一人として平壤に出掛けて接触もしないのに北風だけ吹かす「やっつる感」。太平洋を挟んで向き合う米国と中国の「同時通訳国家」を果たすなど夢の又夢です。